

レコード芸術

2015
1
Tel.04 No.772

[別冊付録]レコード・イヤーズブック2015



Artist of the Month
リッカルド・シャイー
Riccardo Chailly

因習を排した
明晰な解釈が導き出す
新しい発見と
驚きに満ちた音楽

大賞
管弦楽曲部門



[特集] 第52回 52nd RECORD ACADEMY AWARDS

レコード・アカデミー賞



全15部門・26名の選定委員が選んだ2014年度最優秀ディスク



[特別企画]

「レコード芸術 クラシック・データ資料館」公開のお知らせ(定期購読者様限定)

特製CD付

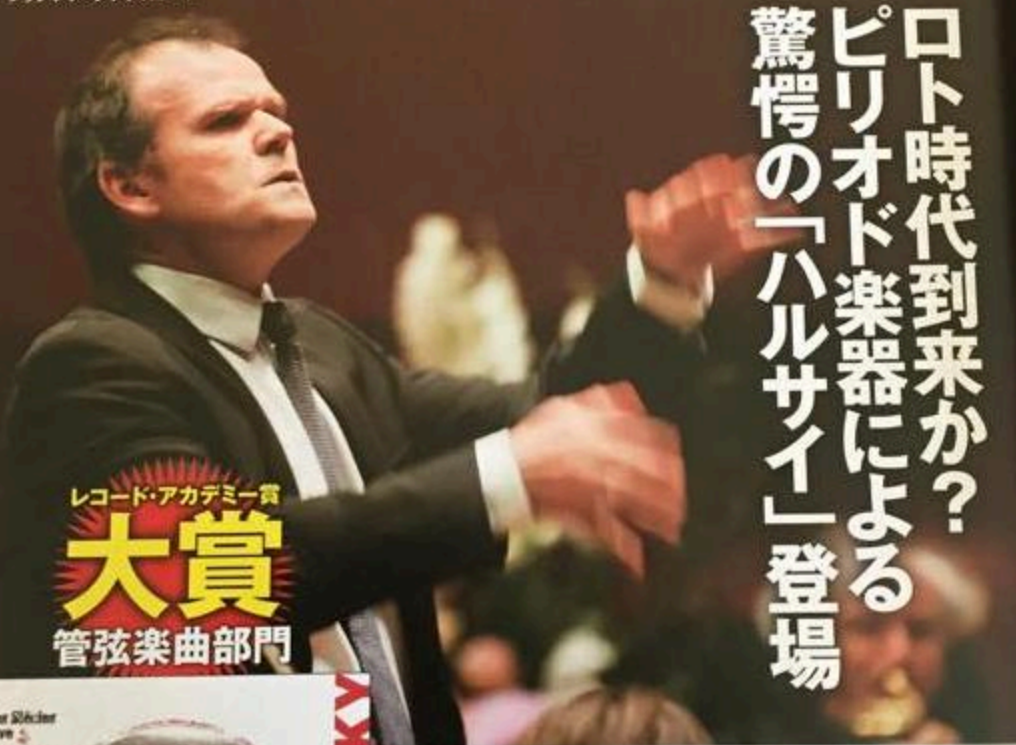
第52回 レコード・アカデミー賞

音楽之友社主催による第52回(2014年度)「レコード・アカデミー賞」が決定いたしました。この賞は、各年度(1年間)に、日本のレコード会社から発売されたクラシック・レコード(本年度は2014年1月号~12月号本誌月掲載数分)の中から、全15の部門において、まず「部門賞」が、各部門の担当選定委員による第一次選定会において合議によって決定されます。

その上で、6つの「特別部門」を除いた9部門の「部門賞」のディスクを、全選定委員が1ヶ月の試聴期間を設けて試聴した後に、第二次選定会を行ない、投票により、年間最優秀レコードである「レコード・アカデミー賞 大賞」および「レコード・アカデミー賞 大賞銀賞」、「レコード・アカデミー賞 大賞銅賞」が選ばれます。

今年度の部門賞は10月26日に、そして3賞および「特別部門/企画・制作」「特別部門/特別賞」の選定は11月23日に行なわれ、各賞が決定しました。

フランソワ=グザヴィエ・ロト



レコード・アカデミー賞
大賞
管弦楽曲部門

ロト時代到来か?
ピリオド楽器による
驚愕の「ハルサイ」登場

STRAVINSKY

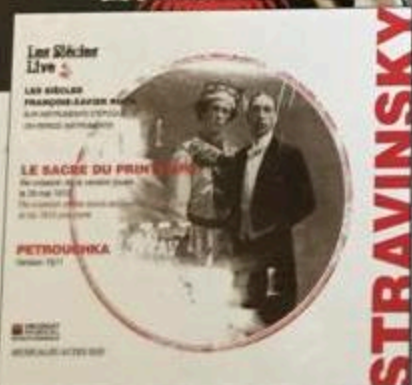
ストラヴィンスキー:バレエ《春の祭典》(1913年版)、
同《ペトルーシュカ》(1911年版)

フランソワ=グザヴィエ・ロト指揮レ・シエクル
(録音:2013年5月、9月(L))

P&E イルジー・ヘーガー

[MUSICALES ACTES SUD@KKC5401]

月評=12月号





【大賞】管弦楽曲部門

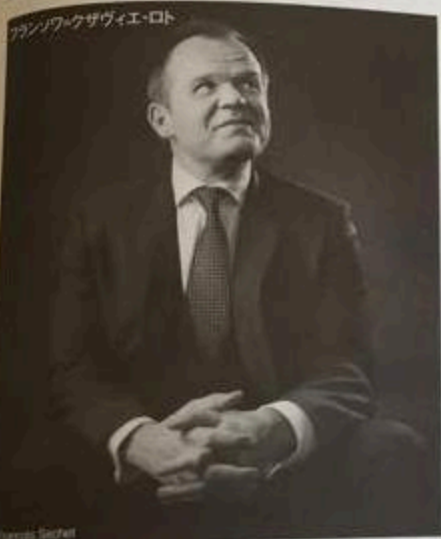
「ピリオド楽器演奏」新時代！ 艶やかに躍動する千変万化の音色

ストラヴィンスキー：バレエ《春の祭典》(1913年版)、
同《ペトルーシユカ》(1911年版)
フランソワ・ザヴィエ・ロト指揮レ・シエクル
(録音：2013年5月9日付)
(MUSICALES ACTES SUD#KKC5401)

STRAVINSKY

●ディスク紹介 浅里公三

ロトとレ・シエクルのストラヴィンスキーの2つのバレエ音楽は、前作《火の鳥》と同様、初版のスコアを初演された当時の楽器を使用して演奏している。ロトは《春の祭典》では自筆譜を基に初演したモントゥー所蔵のスコアや、1921年改訂版の初版も検証したということだが、楽器も《春の祭典》冒頭のバソーン(ファゴット)をはじめ、ピストン式のホルン、トロンボーンやチューバなど、ほとんどが初演当時の《春の祭典》冒頭のバソーン(ファゴット)をはじめ、ピストン式のホルン、トロンボーンやチューバなどが、ソロだけでなく様々に織りなす響きや色彩の多様性に独特の魅力を生み出している。現在のオーケストラからは失われてしまった。弦楽器も含め全体にやや重心の高い響きや多彩な色彩感と表情、ティンパニをはじめ打楽器の効果もこもれを最大限に生かしたロトの指揮も精妙な響きとシャープなリズム感が素晴らしい。複雑なリズムも敏捷性に富み、音楽の推進力が失われることはない。20世紀の古典に新たな魅力をもたらした名演。



受賞アーティストからのメッセージ
フランソワ・ザヴィエ・ロト

レ・シエクルの音楽監督として、そして、レ・シエクルのプレイヤーを代表致しまして、この栄誉ある賞を頂きました。このことを大変誇りに感じております。ピリオド楽器で、《春の祭典》と《ペトルーシユカ》を演奏することは、これらの傑作を初演したフランスのオーケストラへと帰属する素晴らしい冒険でした。日本でこれらを演奏できる機会が訪れますことを心待ちにしております。

選考経過 受賞ディスク決定まで

2014年度の管弦楽曲部門の選定も、前年度と同じように月評を担当してきた滝津園信育氏と筆者とに、毎年ご協力をいただいた浅里氏に加わっていただいた。討論した。今年も、まず初めに各自のノミネート盤を出したが、滝津園氏が6点、浅里氏が6点で、私が5点になった。それは今回の聴数からいえば当然の結果でもあったろう。ノミネートされた盤は9点に及んだが、それらの中で、1票のものが3点、2票のものが4点にわたっていた。それぞれに残っている理由はあるし、たとえばバツパーノによるロッシーニの「序曲集」やバツティスターニによるレスピーギの《ローマ三部作》など注目し得たものもない。既成の名作を超えたものもないので、1、2票のすべてを対象から外した。結果的に3票のものだけが残ったが、ハイチンクの指揮するバイエルン放送響によるR・シュトラウスの《ドン・キホーテ》他は、ノミネートはされたが、ロト指揮のレ・シエクルによるストラヴィンスキーの2つのバレエと同列に考えるわけにはいかない。たしかに、前年度この部門もストラヴィンスキーであったが、そうした配慮は必要ないものにも思われるし、《春の祭典》も《ペトルーシユカ》も、双方が初演版によつて収録されていることは、極めて希少なことであり、何よりも演奏が優れているということ。この盤を選ぶことにした。

藤田由之



2014年度[第52回]

レコード・アカデミー賞 大賞受賞!!

大賞 管弦楽曲部門



STRAVINSKY

ストラヴィンスキー:バレエ音楽
「春の祭典」(1913年初版)
「ペトルーシュカ」(1911年初版)
フランソワ=グザヴィエ・ロト(指揮)
レ・シエクル

ライブ録音:2013年
●KKC 5401 定価¥2,857+税 輸入盤・日本語解説付
●ASM 15(オープンプライス)直輸入盤[ACTES SUD]

大賞銅賞 室内楽曲部門

ベートーヴェン:チェロとピアノのための作品全集



ジャン=ギアン=ケラス(チェロ)
アレクサンドル=メルニコフ(ピアノ)

セッション録音:2013年10月、12月
●KKC 5402(2CD) 定価¥3,750+税 輸入盤・日本語解説付
●HMC 902183(2CD) オープンプライス
直輸入盤[Harmoniamundi France]

特別部門 ビデオ・ディスク「コンサート&ドキュメンタリー」



クラウディオ・アバド・ラスト・ルツェルン

- ① ブラムス:悲劇的序曲
- ② シェーンベルク:グレの歌~間奏曲/山鳩の歌
- ③ ベートーヴェン:交響曲第3番変ホ長調 Op.55「英雄」

クラウディオ・アバド(指揮) ルツェルン祝祭管弦楽団
② 藤村実穂子(アルト)

ライブ収録:2013年8月16、17日、ルツェルン文化会議センター

- KKC 9095(DVD) 定価¥3,810+税 輸入盤・日本語解説付 日本語字幕付
- ACC 20282DVD(DVD) オープンプライス 直輸入盤 [ACCENTUS MUSIC] 日本語字幕付
- KKC 9094(Blu-ray) 定価¥4,762+税 輸入盤・日本語解説付 日本語字幕付
- ACC 10282BD(Blu-ray) オープンプライス 直輸入盤 [ACCENTUS MUSIC] 日本語字幕付

特別部門 企画・制作

J.S.バッハ:教会カンタータ全集



鈴木雅明(指揮)
バッハ・コレギウム・ジャパン
●SACD Hybrid 55枚組 国内独自企画限定プレスBOX[BIS]

日本語解説付

※追加プレス(限定)が予定されています。詳細は弊社HPにてご案内します。



現在の「ピリオド」シーンの最前線に立つフランソワ・グザヴィエ・ロト ©François Sechet

イマが旬!!
指揮者&アンサンブル編
これらを聴かずして「ピリオド」を語るなかれ

現在「ピリオド」シーンの最前線で活躍する演奏家たちは、もはや時代楽器やワグネル音楽という、棲み分けをはるかに超越し、次々に意欲的・実験的な演奏を展開している。まさに「イマが旬!!」の彼らの演奏を、特徴や傾向もまとめてチェックしよう。

Francis-Xavier Roth & Les Siècles
フランソワ・グザヴィエ・ロト & レ・シエクル

前代未聞のすごさ!
これこそ「ピリオド」最先端
矢澤孝樹 Takaki Yuzawa

およそ4半世紀近く前、ジョス・ヴァン・インマゼールがピリオド楽器によるオーケストラ「アニメ・エテルナ」を結成した時、究極の目標は「ストラヴィンスキーの《春の祭典》を演奏すること」だった。彼らは慎重な歩みの末、近年ようやく20世紀作品の録音にたどりついたが、チョモランマへの登攀は、同じく《春の祭典》の演奏を目指し結成されたレ・シエクルが、未踏の直進ルートを猛烈な勢いで駆け上がり実現してしまった。

ロトとレ・シエクルは、古楽演奏史の常識を打ち破る存在である。大方のピリオド楽団は、フランス革命以降のコンセルヴァトワール教育が奏法を平準化する前の、「音話」の修辭学が生き延びた時代を十分に咀嚼吸収して、19世紀の日付変更線を越えてゆく。

作曲家の意思を前に「境界」など意味を成さず!
増田良介 Ryosuke Masuda

本誌3月号のインタビュー記事(文:佐伯茂樹氏)で、ロトはこんなことを言っている。「私がいちばん大切にしているのは、作曲家が何を求めていたのかということ。作曲家の魂とか精神、そこに到達したいと考えているのです。実際に当たり前の意見だ。指揮者なら誰でも、たぶんメンゲルベルクでもゴッホでも

STRAVINSKY ストラヴィンスキー:パレエ(春の祭典) (1913年版), 同《ペトルーシュカ》(1911年版)
フランソワ・グザヴィエ・ロト指揮レ・シエクル
(録音:2013年5月,9月(L))
[MUSICALES ACTES SUD@KKC5401]

▶すでに賛辞あふれる本盤だが、やはり挙げないわけにはいかない。管も素晴らしいが、弦楽セクションの奔馬のようなグルーブ感!2曲の意外なほどの「近さ」も実感でき、ならばこそ《春の祭典》の革新性に納得。

サン=サーンス:交響曲第3番《オルガン付き》, ピアノ協奏曲第4番
フランソワ・グザヴィエ・ロト指揮レ・シエクル, ダニエル・ロト(org) ジャン=フランソワ・エッセル(p)
(録音:2010年5月,6月(L))
[MUSICALES ACTES SUD@KKC5197]

▶身ぶりの大ききやえ胃もたれ感もある《オルガン付き》から、古典性と革新性の妙なるブレンドが聴こえる。協奏曲も瑞々しい魅力を回復。衝撃的サン=サーンス体験。この時代のフランス音楽をどんどんリポートしてほしい!

DUKAS デュカス:交響詩《魔法使いの弟子》, カンタータ《ヴェレダ》, 序曲《ポリュエクト》
フランソワ・グザヴィエ・ロト指揮レ・シエクル, シャンタル・サンソン(S), ジュリアン・アン・ドラン(T) ジャン=マニュエル・カンドノ(Bs-Br)
(録音:2011年4月,5月(L))
[MUSICALES ACTES SUD@KKC5391]

▶デュカスの管弦楽曲をピリオド楽器で聴けるなんて。厚塗りのCGでなく、テクニカラーの質感と肌触りで蘇る驚愕の《弟子》。若書きカンタータの復活も驚きだが、こうなると《ラ・ペリ》と交響曲をぜひ聴きたい……。

だが、レ・シエクルのデイスコグラフィにおいてもっとも古い作曲家は、今のところペリリオーズとシヨパンである。かつてペリリオーズが、ガーディナーが、入念な準備の上で挑んでいた、危険なロマン派地帯の最初の難関が、ロトたちにとってはベース・キャンプだ。

彼らの演奏の特性は、たとえばインマゼールも録音したドビュッシーの《海》などを聴くとほつきりする。インマゼールたちの演奏に、ドビュッシーの新しい語法に驚き、響きと構造の革新性を瞠目しながら解き明かす感動があるのだとすれば、ロトたちの演奏は、楽器と奏法を見直すことで見なれた世界が変貌するといふ、再発見の興奮に突き動かされている。つまり、古楽演奏史における常道である「遠過去から近過去を発見する」ルートとは真逆の、「現代から遡って再発見する」ルートが選ばれているのだ。

STRAVINSKY ストラヴィンスキー:パレエ(春の祭典) (1913年版), 同《ペトルーシュカ》(1911年版)
フランソワ・グザヴィエ・ロト指揮レ・シエクル
(録音:2013年5月,9月(L))
[MUSICALES ACTES SUD@KKC5401]

▶これまで聴いてきた名盤では、《春の祭典》は何よりも原始的で荒々しいリズムの音楽だったが、楽譜も楽器も奏法も通う当盤で聴くと、この曲が、思いがけず柔らかく繊細な色彩感に満ちていたことがわかる。

BERLIOZ ベルリオーズ:幻想交響曲
フランソワ・グザヴィエ・ロト指揮レ・シエクル
(録音:2009年8月30日(L))
[MUSICALES ACTES SUD@KKC5196]

▶《幻想》のピリオド演奏という、どうしても作品の刺激性を強調する方向に向かいがちだが、ロトの考証は、むしろこの曲がベートーヴェンと地続きであることを明らかにする方向を示したようだ。

STRAVINSKY ストラヴィンスキー:パレエ《火の鳥》全曲 (1910年版) (&パレエ《オリエントタル》)
フランソワ・グザヴィエ・ロト指揮レ・シエクル
(録音:2010年10月(L))
[MUSICALES ACTES SUD@KKC5195]

▶初演時に伴奏したバリのオーケストラを楽器や奏法で丹念に再現するだけでなく、その前に演奏された、いろいろな作曲家の作品の寄せ集めによるパレエ《オリエントタル》を復元して演奏してしまうという凝りようだ。



もそう思っていたら。しかし、その結果はそれぞれ違う。「レコード・アカデミー賞」大賞を受賞した《春の祭典》でロトがやったのはどんなことか。さまざまな楽譜や書簡などの膨大な資料を集め、ストラヴィンスキーが繰り返した数々の修正を検討し、その方向がすべて「演奏しやすくする」という1つの方向を向いていることを確認する。それではということ、作曲家の意図が最も反映されていたであろう初演時の響きを再現するために、当時の楽器を集め、当時の奏法を推定する。そしてそこからテンポを決め、表情を決めて、演奏として完成させる。

大変な手間と時間が必要だったはずだ。しかし、ロトの言う「作曲家が何を求めていたのか」を知り、それを具現化するのにこのような作業が不可欠だったということは自然に理解できる。初演時の響きの再現も、それ自体が目的でなく、

最良の演奏を実現するために必要だったということが明快に裏付けられている。この過程で、たとえばクラフトの2007年録音こそ作曲家の意図を最も反映しているとロトが判断していたら、そういう演奏になっただろう。そうなる、考え方は「ピリオド」でも、出てくる音は「モダン」と区別がつかないことになる。こうなると、ピリオドもモダンも関係ない。あるのはどこまで徹底してやるかという熱意の差だけだ。たとえば、ピリオドとモダンの対立などということ、いずれ意味がなくなる。ロトとレ・シエクルの演奏を聴くと、その変化はもうとっくに始まっているということを感じするのだ。

これは、すでに古楽の領土が十分豊かに耕され、そこから富を自由に収穫できるようになった世代の特権にほかならない。彼らはその特権を存分に活用し、どちらかといえば古楽に慣れていない聴き手も、再発見の旅に連れ出す。

ピリオド楽器の俊敏さは強靱ではねの利いたリズムに生かされ、管楽器の音色の新鮮さは、「本来はこうだった」という確認よりも、「こんなに楽しい世界があったのじゃないか」という喜びへと即座に置換される。こんな団体は前代未聞だ。そして、デュボワやデュカスなどの「再発見」も含め、彼らが自国の音楽言語の称揚に努めていることも特記したい。グローバル化に抗するといふ古楽演奏の本質を、見かけの新しさにもかかわらず、彼らはしっかりと押さえているのだ。